なく木中へ入り給ひしことあり。今高井といふ所に、地藏杉というて大木あり。』などゝ見える。明治八年十月に至り、堂ヶ谷と下島越・法住寺とを併せて春日野と改稱した。

ドウガタノシヒ　堂形の椎　金澤の堂形御藏の附近に二株の椎の古木があつたのが今も縣廳の玄關前に存してゐる。この地には前田利常の書院を設けたことがあるが、それは御藏の造られた前であらう。又綱紀の萬治三年には米藏の附近に馬場を設けた。後の重敎も屢こゝで騎射を試みたが、元明元年老樹が妨害になつたから切拂はせて、馬場の樣子が非常に變化したとある。思ふにかの老椎は利常時代の庭園樹で、天明の斧鉞を免れたものかも知れない。東方の一株は目廻り五米四、高さ一六米。その主幹は既に老廢して、根部から別に七幹を生じてゐる。西方の一株は目廻り六米、高さ二二米。

ドウガタババ　堂形馬場　金澤の堂形にあつた。越登賀三州志來因概覽附錄に、古への堂形馬場は古記に所謂南馬場であらう。慶長七年十一月雷火によつて金澤城天守燒失の時、南の堤側の三十三間の的場、その外櫻の馬場等の建物が燒失したとあつて、その馬場は後の堂形新馬場よりも玉泉院丸の方へ寄つてゐた。

ドウガタブギヨウ　堂形奉行　寛文年中大窪九郎兵衛・青山金右衛門が勤め、同三年には後藤治右衛門が命ぜられ、延寶の初から四人充勤務し、以て藩末に至つた。堂形米倉を管理する藩吏である。

ドウガタマトバ　堂形的場　金澤城外の後に堂形米倉の置かれた所にあつた。越登賀三州志來因概覽附錄に、堂形は其の初京都の三十三間堂の距離に倣ひ、射手の士に通り矢を修練せしめた爲の名であるとし、混見摘寫にも、文祿四年豐臣秀次生害の後、その射手の士を加賀藩に召抱へられたが、その頃堂形と名づけて的場を作り、六十六間の通り矢を命ぜられたと記する。

ドウガタマヘ　堂形前　金澤廣坂の下で、堂形米倉の前面の道路をいうた。明治四年四月戶籍編成の際改めて廣坂通と稱することになつた。

ドウガタマヘヒヨケチ　堂形前火除地　金澤の堂形米倉前にあつた廣場をいふ。寛永八年四月十四日犀川橋爪から出火し、南風によつて城閑を類燒せしめ、十二年五月九日また河原町より出火し、城の西南を燒拂うた。是によつて此の附近に火除地として廣場を設けたものと見える。享保の末に至つても、堂形前・仙石町・松原町・金谷門前にかけて空地があり、所々に水溜の堀すらあつた。その後寛保・延享比から追々諸士の邸地に賜はつたが、寶曆九年四月の災後再び之を轉地せしめて、堂形前に空地を作つた。然るに文政二年には學校をこゝに移し、前田内藏助以下の邸をも堂形前に賜はつて、漸く空地を狹めた。今の縣廳及び第四高等學校前面の地は皆古への火除地の一部である。

ドウカン　道閑　↓ソノダドウカン　園田道閑。

トウガンジ　等願寺　金澤土取場永町に在つて、眞宗東派に屬する。初め森下町に居たが、萬治二年今の所に移つたといふ。

ドウガンヤ　道願屋　金澤河南町（今片町）大橋東側に居住した菓家である。生菓子を業とし、殊に富裕であつたが、寛政の頃褒徵した。

ドウガンヤモクタン　道願屋木端　金澤河南町道願屋の主人で、後に河原町に隱居した。奇行があり、又蓄財に長したが、中賈鹽屋清右衛門の富貴となる法を尋ねた時、木端はそれに答へて、先づ一門一家或は懇意なる者の褒徵したるを助けて後にこそ富貴となり得るというた。その他多く咄隨筆に載せられる。享保十一年十一月歿。

ドウキアン　道機庵　加賀藩祖前田利家の父利春の法號。詳しくは道機庵休岳居士。

トウキチバナ　藤吉鼻　鹿島郡瀧鼠の部落南方の岬。

トウキユウ　桃久　↓スズキトウキユウ　鈴木桃久。

ドウギヨウザカ　同行坂　白山の尾添口登路なる猫島の南に在る坂で、道路甚だ嶮しい。

ドウギリ　胴切　萬治二年越中高岡の者が、弟の遺產を得んと欲して、非分の公事を企てた爲、胴切に處せられたことがある。延寶八年城中奥納戶土藏に入り、數次窃盜した足輕も、亦胴切となつた。後世生胴と稱せられた刑は、これと同じい。

トウゲ　道下　鳳至郡櫛比庄に屬する部落。天正の頃には町としたものと村としたものとがある。能登名跡志に、『人家二百軒許。商家交りあり。よき所也。收納藏數戶前あり。此村は寺口（門前）へ近くて、一山の用達し繁昌に、家居もよき所なりしに、近年は燒失にて家立惡しくなりし也。』と記する。

トウケイセンセイシシユウ　桃溪先生詩集一册。小瀨復庵の詩賦二百餘首を集めたもので、七言律が最も多い。復庵の歿した時家に稿を留めて居なかつたから、友人本保長益が所々に散逸するものを集め、享保九年之を編したものである。

トウゲガハ　道下川　↓ハツカガハ　八ヶ川。

トウゲジヨウ　道下城　鳳至郡道下に在つた。越登賀三州志故墟考に、櫛比庄道下村領城迹は、此の村海濱の砂地往還より南方の山上で、城の遺形分明でないと記する。

トウゲダイク　道下大工　鳳至郡道下に大工の良匠が多く、殊に道下大工と稱せられた。慶長拾七年八月十二日芳春院夫人の判書に、『われら知行分三ヶ國之内諸やく以下之事、大納言殿以來しやめんの事ニ候間、今以たれたれ申候とも、其意をなすべく候也。』とあつて、宛所にたうげ村大工・同肝煎と記されてゐる。

トウゲノサブロザエモン　道下の三郎左衛門　鳳至郡道下の百姓。前田利家入國以後屢爲に馳走したから、天正十年十月十日高十五俵を扶持せられ、後に十村に任ぜられた。子孫世々三郎左衛門を襲名する。

ドウケン　道顯　↓インシドウケン　隱之道顯。

ドウケン　道顯　↓ミツザンドウケン　密山道顯。

ドウゲンキ　道元忌　曹洞宗に於いて宗祖道元の爲に毎八月廿八日に行うた法會で、道元は建長五年八月廿八日に示寂したのである。三箇屋板六用集に、『十月廿八日此日道元和尙忌日、大乘寺にて法會有。』とし、增補六